

	重点目標	具体的な事業計画	評価項目	評価結果・改善方策	次年度へ向けて
1	教職員全体で学校の将来像、まなびの在り方について考えていく	・研修会の実施 ・全常勤教員が総合的な探究の時間を担当 ・全常勤教員がゼミを企画・実施	・現在そしてこれからの時代に即した学校像・将来像、すなわち生徒、保護者、地域、教職員が共にまなび合う環境・関係・場を考え、構築していく。 ・「テラ・スコラ＝地球がまなびの場」を理念として掲げる本校が提示できる「まなびの在り方」について考え、実現していく。	・校内研修では、本校の理念・方針や学校設定教科アルカに位置づけられている各科目の内容がどのような経緯を経て現在の形になったかの情報を共有するとともに、現在実施されている各学校設定科目の実施状況を報告し合い、その意義や可能性を考える契機とすることができた。また、教育評価の歴史的変遷に関する学習会を実施し多くの示唆を得た。 ・全常勤教員が総合的な探究の時間を担当し、ゼミ活動を企画・実施するという計画は、ほぼ達成されており、特にゼミは多くのラインナップを取り揃えることができた。	・2025年度は新規教職員も採用予定であるため、これを良い機会と捉え、担当業務の交代等、既存に囚われない合理的かつ効率的な業務方法の確立に努めるとともに、研修の充実を図る。 ・常勤教員1人1ゼミを再度促す。
2	本校の理念や魅力・特色について生徒・保護者・地域の方・関係各所等を含めたすべての人に向けたわかりやすい発信	・ホームページのリニューアル ・中学生向け体験会、中学校教員向け学校説明会、入学プログラムの内容の確認と見直し ・中学校回りや中間教室・フリースクール等の訪問	・近年、不登校児童・生徒は増加の一途であり、中学生の進路選択として通信制高校が普通に選ばれるようになった。同時に長野県を募集区域とする通信制高校も増えている。このような中で、本校の他校との違いや、何よりも理念や魅力・特色をわかりやすく発信することは重要である。そのため2023年度に引き続きホームページリニューアルをおこない、完成させる。 ・中学生向けの体験会や教員向けの学校説明会、入学プログラム（テラ・スコラDays）の内容の確認と見直しをおこなう。さらには中学校回りや中間教室・フリースクール等の訪問もおこなう。	・WEBサイトのリニューアルが完了した。本校の理念、魅力・特色、カリキュラム、入試情報、学費、ギャラリーや他校との違いをわかりやすく簡便に発信できたため、校内外の好評を得た。内容はパンフレットのものを反映し、パンフレットを使ったリニューアルの告知もできた。 ・中学生向けの体験会は、需要の高まりや参加者増に対応し、開催日を増やし、非常勤を含めた学校全体で取り組むプロジェクトとなった。教員向けの学校説明会は内容を見直し、生徒の生の声がより伝わりやすくなるとともに、特別支援関係を含む中学校・中間教室等から依頼を受けて実施する説明会も入試係全体で可能な限り実施した。入学プログラム（テラ・スコラDays）の見直しはパンフレット作成時に継続し、オープンキャンパスについては説明資料の見直しと話し手の育成を実施した。また各合同庁舎における高校進学説明会にも、学校全体で対応、特に松本会場は下見を実施して配置や案内の仕方を検討、活況を呈した。 ・中学校については入試・共生のセッション合わせて3校を訪問した他、広報で放課後デイサービス等の福祉事業所を訪問、不登校や特別支援の関係者を含めて適切な情報発信に努めた。中間教室やフリースクールの訪問は実施できなかった。 ・情報集約については、Googleフォーム及びL-Spaceの投票機能を用いた参加申込フローの整備が進んだことで、利用者の利便性が向上、集計におけるミスの回避ができた。	・入試セッションでは、従来事業の内容の見直し、継続とともに、入学前相談に対応できる人員を増やす。 ・広報セッションでは従来事業に加え、CM等の映像媒体作成（特にabn）、市役所とMウィングへのチラシの常置、WEBサイト「未来地図」掲載の情報編集、パンフレットの写真入れ替えを実施する。
3	新教育課程実施にともなう生徒の思考力・判断力・表現力の伸長の促進	・学校設定教科アルカの科目の内容や実施状況について確認・見直し ・総合的な探究の時間の各テーマの内容や実施状況について確認・見直し ・カリキュラム・マネジメントの実施 ・学期ごとの振り返り・意見交換の場を設け、成果や課題の共有化を図る	・新教育課程となり3年目となる。ここで学校設定教科アルカの科目、総合的な探究の時間の各テーマのまなびの内容や実施状況について確認・見直しをおこなう。その上で現状に即したまなびの実現や充実、生徒の思考力・判断力・表現力をより伸長できるように工夫する。 ・科目やテーマの増減、さらには教育課程の再構成についても検討をおこなう。学期ごとの振り返り・意見交換の場を設け、成果や課題の共有化を図る。	・学校設定教科アルカの科目の内容や実施状況については、校内研修で科目担当より発表してもらい、科目内容や実施状況の確認・共有化と意見交換の機会を設けることができた。 ・総合的な探究の時間については、3つの新テーマを開講し、今後も基本的に全常勤教員が総合的な探究の時間を担当し、実施することとした。 ・カリキュラム・マネジメントについては、旧教育課程の科目を今年度いっぱい終了すると共に、学期ごとの振り返り・意見交換の場を設け、成果や課題の共有化を図った。	・教育課程を統一し、内容の充実化をはかる。 ・それにより余裕ができ、新しい試みにも取り組むことが可能になるようにする。

4	本校独自の活動であるゼミ活動における「旅」の充実	・「西表島スタディツアー」「フクシマの現在・過去・未来を考えるゼミ」「神社を巡りニホンの古層に出会う旅～伊勢・穂高・諏訪～」 「オキナワから社会を考えるゼミ」の実施 ・台湾を舞台とした旅「台湾を知り世界を考えるゼミ」の新規実施 ・ネパールを舞台とした旅を2025年度に実施するための準備	・2023年度は2022年度に引き続き「西表島スタディツアー」「フクシマの現在・過去・未来を考えるゼミ」「オキナワから社会を考えるゼミ」を実施できた。 ・2024年度にはそれに加えて台湾を舞台とした旅を実施する。 ・2025年度にネパールを舞台とした旅を実施するための準備もおこなう。	・2022年度から続いている「西表島スタディツアー」「フクシマの現在・過去・未来を考えるゼミ」「オキナワから社会を考えるゼミ」は例年通り実施できた。 ・三重への旅は、名称を「神社を巡りニホンの古層(ルーツ)に出会う旅 ～伊勢・穂高・諏訪～」に変更、旅の内容を明確化、生徒にわかりやすくしたことで、神社を意識して参加した生徒が増加するなど奏功した。 ・「台湾を知り世界を考えるゼミ」は2024年度新規実施し、反省点等を活かした来年度への継続に目途がついた。 ・2025年度実施予定のネパールへの旅の下見も無事に実施できた。予期せぬ事態も多々あったが、むしろ下見としては有意義であった。	・2025年度の重点目標を「本校独自の活動であるゼミ活動の整理と充実」とし、「ネパールの旅」の9月新規実施（9月実施予定）や「オキナワから社会を考えるゼミ」の実施時期見直し等を進める。 ・校内の会議等で、各ゼミの内容の全体化・共有化を図る。
5	生徒会やクラブ活動において生徒の主体性と自治の確認と推進	・生徒会活動やクラブ活動の本来的意義である自治的活動を再確認 ・生徒が主体的に活動できるように生徒会活動やクラブ活動の整備・改善	・生徒会活動やクラブ活動の本来的意義である自治的活動を再確認し、生徒が主体的に活動できるように生徒会活動やクラブ活動の整備・改善をおこなう。	・生徒会執行部や各クラブのメンバーの多くが通年で役職を担ったことで、生徒会やクラブ活動の理解が高まり、主体的かつ円滑に進めることができた。 ・生徒会執行部や各クラブのメンバーに多くの新入生が参加することができたが、自治的活動の再確認については引き続き課題である。 ・生徒の主体的な活動の活発化は進み、3つの新規クラブ（ソフトテニス部・創作部・卓球部）が発足した。	・文化祭を通して地域との関わり、生徒が主体となって、地域と連携できる体制づくりを進めるとともに、自治的活動の意義を再確認する。 ・生徒の意見を聴取できる生徒総会の運営を検討する。 ・生徒会やクラブ活動の整備・改善を行い、さらに生徒が主体的に活動できるように場所や時間の見直しを図る。
6	「まなびにくさ」の研究とその成果の共有	・さまざまな背景を持つ生徒の「まなびにくさ」の研究とその成果の共有 ・レポート・スクーリング・試験における難易度の設定や提供方法について検討 ・さまざまなニーズにどのように応えていくか批判的に検討	・さまざまな背景を持つ生徒が在籍する本校において、生徒にとっての「まなびにくさ」にはどのようなものがあるのかを研究し、その成果を共有する。 ・レポート・スクーリング・試験における難易度の設定や提供の仕方について検討する。またさまざまなニーズにどのように応えていくかも批判的に検討する。	・2024年度は「まなびにくさ」について、とくにレポートの難易度や提供の仕方について検討することはできなかった。 ・「いわれたとおりに支援をしてあげる」のではなく「生徒が自分で困りごとを相談できる環境づくり」についてもっと教職員間で共有できるとよかった。	・2024年度には生徒数が激増したことから、生徒が抱える「困りごと」も多様化したと推測される。2025年度中には「こんな困りごとがあった」という事例を収集し、教職員会議等において共有する。 ・外国籍、外国にルーツを持つ生徒が増えていることから、共生セクションにおいて調査を行い、どのような困難があるか洗い出す。 ・レポート・スクーリング・試験における難易度の設定や提供方法についても引き続き検討課題とする。
7	本校らしい進路指導の在り方と卒業後の行き先となる進路先の研究と開拓	・本校らしい進路先の研究と開拓 ・校内塾を設置し、一般選抜希望の生徒に対応 ・大学、短大、専門学校の見学、企業の見学の実施 ・進路面談等の計画的実施	・全国的にも進路決定率が低いとされる通信制高校だが、通信制高校に在籍する生徒は非常に多様なため数字だけでは見えない部分は多くある。 ・学校基本調査の分類では分類できない進路先も多数存在する。しかし、統計的数字とは別としても多様な生徒が在籍している以上通信制高校として、何より本校らしい進路先の研究と開拓は重要である。 ・校内塾である「テラ・コヤ塾」を設置し、一般選抜希望の生徒にも対応する。 ・進路先を具体的にイメージするためにエクスカッションを実施する。 ・計画的に進路指導をおこなうために進路スケジュールの確立に努める。	・複数の大学エクスカッションを実施、松本大学・松本短期大学（7月）、京都精華大学・京都芸術大学（2月）を2024年度から増設した。参加を契機に進学先を決めた3年次生や進路選択の参考にした2年次生が見られた。 ・別途、教職員による日本福祉大学、京都精華大学・京都芸術大学の視察も実施、多くの教職員が大学に関わる機会を得た。 ・就職に繋がる展望を得るため、多くの事業所に本校の特長を知ってもらう機会を持ち、在学中のアルバイト就労の可否について確認を進めた。またヤングハローワークと連携し、生徒向けの事業所説明会に就職希望生を参加させることができた。 ・進路の資料棚をより見やすく整理したため、利便性が向上した。蛍雪時代の学校案内、学校推薦年鑑、小論文ダイジェストなど、受験情報誌を揃え、ひとり暮らしガイドなど費用面の無料パンフレットも多数取り寄せることで、様々な受験情報が調べやすくなった。 ・校内塾による一般選抜受験者への対応も大きく前進した。今後、成果の検証が必要だが、このような進路指導の拡充は、入学希望者への新たなアピールポイントにつながった。 ・進路面談時のGoogleカレンダーの予約機能の活用について、実証を伴って一定の知見を得られた。	・今後3年次の人数が増大することにより、これまでの進路対応だけでは追いつかなくなる懸念がある。進路選択の流れに対応できる進路指導体制を早期に確立する必要がある。 ・進路サポート企画でより多くの人に、早期に進学・就職の流れを把握できるようにする。 ・私立大学の入試が多様化しており、とくに総合型では、プレゼン、小論文、面接、基礎学力考査など多岐にわたる対策が必要。担任一人で対応するのは限界があり改善策を探る。 ・進学の動きが例年に比べ速くなり、学校側の対応も今までと違った動きが見られた。従来の感覚・流れでは対応が難しくなる懸念があるため、指定校推薦の活用等を再検討する。 ・就職を希望する生徒に、より多くの仕事の種類を案内できるような体制を確立する。